

# 東彼杵 グラフ

16 / 23 郷 千綿宿郷

千綿宿郷の夏といえは祇園祭。  
路地を歩くと、どこかそわそわ。  
地域の人たちが大切に守り続けた  
祭が今年も盛大に行われる。







左 千綿宿の文化に詳しい西川勇さん。話しも上手  
上 祭が終わると普段履きに重宝される“岡木草履”  
右 「なごう生きんば」と半生を振り返る岡木賢一さん

## 水神さまを祭る、千綿宿の熱い夏

長崎街道の宿場町として栄えた千綿宿。約400mの街道沿いには、大浦慶と取り引きした商家など古い建造物が残り、そぞろ歩きをすると楽しい。川や港など水辺に続く小路はついつい迷い込みたくなる面白さ。「今日はなんね」と笑顔で気さくに話しかけてくれる住民も魅力だ。

「もうすぐ水神さまやけん」「最近、橋がきれいになったとよ」。7月に入った千綿宿郷は祇園祭モードに切り替わっていた。千綿宿郷の対岸に水の神様を祭る水神宮がある。祇園祭では、水神宮で神事を執り行った後、神輿にご神体を移して郷内を練り歩く。竹箒を先頭に弓、太刀、五色の旗、笛、三味線、小太鼓、大太鼓、神輿と続く行列は見ごた

えあり、多くの見物客で賑わう。これらの祭事の世話は郷内を東組、新町組、江川組の3つに分けて、踊り町を持ち回り。以前は各組が祭事のすべてを受け持っていたが、「協力せんばたっていかん」と郷民総出の祭となったそうだ。

水神橋のたもとに住む川崎節子さんは「中学生が一生懸命に踊るんです。かっこいいですよ!」と道踊りが見どころと教えてくれた。千綿の祇園祭について詳しい方も何人か紹介してもらい、その1人の西川勇さんを訪ねた。

「昔の千綿川は暴れ川で水難事故が多く、子どもさんもよく亡くならした。そいで、一番の河口だった琵琶湖のところに水神さまを祀ったそうだ。祇園祭はそのずっと前から。





テクノパーク入口の信号から入ってくると牛ノ頭さまがある。そもそも祇園祭は牛頭天王に五穀豊穡や無病息災を祈願するもの。もちろんその頃から子どもの無事を祈っていた。行列の先頭で竹箒や弓、刀などを持つのは子どもがしているでしょ。道踊りも子どもたちが前」

千綿宿郷の伝統や文化にまつわる話は父から叩き込まれたと西川さん。数少ない作り手となり受け継いだ鬼燈籠も、人形浄瑠璃、芋たんきり飴、そうめん製造などの話も興味深かった。

路地で数匹の猫に出会い、付いて行くと履物の小さな工場に入った。通称“岡木草履”。数年前に廃業したが、祇園祭で使用するゴム草履は今でもこちらで1つ1つ丁寧に手作りされている。

「ここにかかっているのが祇園さまの草履。踊り子さんから世話方まで全部ね。毎年、新品ば作って水神さま

に納めると」とご主人の岡木賢一さん。ハツラツとした受け答えて、90歳に近いという年齢を聞いて驚いた。

岡木さんは“履きだおれの町”の神戸からこの地に移住して半世紀以上。千綿宿郷で暮らすほとんどの人は“岡木草履”にお世話になっている。祇園祭で約2時間の練り歩きをしても、疲れることなく履きやすいと評判だった。

「私のは体裁は二の次。農家履きじゃけん、強く軽く作らねばね。あとはブツブツを残して足の裏を気持ちいいようにしとる(笑)」と岡木さん。千綿の祇園祭に“岡木草履”はなくてはならないものと自負している。だから、体が動くうちは水神さまに納めていくつもり。廃業する時に先を見越して材料は購入済みで、工場の隅にはゴムのシートが積まれていた。

祇園祭ではその足元にも注目したい。







素敵な笑顔と花がある長崎街道の路地裏。フリーエルさん一家もその中に！

祇園祭まで2週間を切ると路地は一層ざわざわとする。毎夜、着物でコミュニティーセンターへ出かける沖永美佐江さんは7、8年前から道踊りを任されており、ここで踊りの稽古をつけている。全く経験のない子どもたちにゼロから教えて、披露して恥ずかしくないレベルまで仕上げるといふ。

「稽古は厳しかですよ。休憩なしでやりますもん。それでも千綿の子は素直かですもんね。みんな一生懸命されますよ」と沖永さん。あえて難しい曲目を選び、向上心を育てながら教えると、今時の子どもたちも乗ってくるとのこと。「決めるところはピシッと揃えることを意識させています。目線とか、足先とか。そのへんを見て欲しいですね」ときりりとした表情で話した。

面白いところがあると、沖永さんに路地裏を案内してもらった。古い井戸の周りに近所のおばちゃん、おじちゃんたちが集まっている。昔から野菜などを洗い、おしゃべりをする場だったそうだが、最近、新たな仲間が増えた。アメリカ海

# コ 路 ミ 地 ユ 裏 ニ の テ 井 イ 戸 ー 端

軍のフリーエルさんファミリーが井戸のそばの空き家を別宅として利用し始め、早くも「ゴメスさん」と呼ばれてなじんでいた。

「私たちはまず海が見える景色のよさだけで購入しました。だから、どんな地区なのか、どんな人が住んでいるのか不安でした。でも心配なかったです。ここは故郷（ペルー）にいるような雰囲気があります。祇園祭も楽しみですね」と奥さんのエルワンダさんは流暢な日本語で話す。自宅から見る海景色はフロリダ出身のご主人もお気に入り、ゆくゆくは定住する考えている。

私たちがいつ訪ねても歓迎してくれる千綿宿郷の人たち。その温もりは外国人にとっても心地よいものだった。

7月19日に開催される千綿祇園祭がますます楽しみになった。

※千綿宿郷へは、町営バス「千綿宿」のバス停を利用。

次回は駄地郷。お楽しみに！